台湾ランニング事情　第6回
2016金門マラソン

石原忠浩（政治大学助理教授、助理研究員）

台北の冬は雨が多く、湿度も高め、晴れ間は多くない。またマラソンで最も記録が出やすいとされる10度前後まで下がることは滅多にない。日本の冬の適度に乾燥して晴れの多い気候にあこがれる自分にとって、以前から気になっていたレースを離島に見つけた。今回は、2月末に金門島に遠征した金門マラソンを報告する。

1．金門という場所

中国福建省厦門（アモイ）から目と鼻の先に位置する、金門島は現代中国史にとっては欠かせない舞台である。

国共内戦末期、1949年10月1日に中華人民共和国が建国宣言をした直後の10月末に金門島で古寧頭戦役と呼ばれる激しい戦闘が三日間にわたって繰り広げられたが、ここでは国民党軍が共産党軍を撃退している。なおこの戦役には、日本人顧問団が指揮（関与）したとされている。

冷戦時代には、1958年8月から10月にかけて大陸側と金門島の間で激しい砲撃戦が繰り広げられ、台湾では砲撃が開始された日付にちなみ「八二三砲戦」の舞台として教科書で学んでいる。中台双方が相手を「解放」すると主張していた時代、金門は対峙する最前線の島として外国人はもちろんのこと一般台湾人の往来も制限されていた。台湾では1987年に戒厳令が解除されたが、金門島で戒厳令が解除されたのは5年遅れること1992年であった。

「最盛期」、金門島には13万人以上の軍隊が駐留していたが、現在では1万人以下まで減少しており、言い換えるならば、両岸関係改善の象徴的場所である。2001年からは金門島と対岸厦門間に「小三通」と呼ばれる両岸住民の直接往来が開放され、2008年以降「大三通」の解禁後は中国人観光客で賑わう観光地となっている。「小三通」による両岸の往来は2001年には2万人程度の規模であったが、2015年の統計では約70倍の140万人が往来するまでの活況を示している。

2．レースに向けた準備

レース申し込み：

近年台湾でもランニングブームが高まっているが、日本のように抽選を採用しているのは、太魯閣マラソンなどごく一部の人気レースにとどまっている。金門マラソンの申し込みは、早い者勝方式を採用しているが、規模の小ささもあり、例年激戦となっている。今回の申し込み時間は平日8時という、一般の社会人にとっては出勤時間の時間帯であったが、筆者も通勤中のMRTの中でスマートフォンを使っての申し込みにどうにか成功した。普段、練習をともにしている跑友（ラン仲間）は一人○、一人×という結果に終わった。報道では、今回の申し込みは18分間で定員に達する人気ぶりであった。

航空券の確保：

今年の金門マラソンは三連休の中日のため、フライトの確保にも難儀する。筆者は今まで、会議、出張、視察名目で同島を5回訪問しているが、平日移動が多く、チケット手配も先方が処理してい

たので苦労は感じたことがなかった。今回は、妻子にも離島風情を感じてもらおうと家族帯同での行程であり、自ら手配をすることになった。

フルマラソンに観光を組み込むのであれば、1泊2日の強行軍では日程的に惜しいので多くの参加者が、初日は軽めの観光、二日目午前レース、午後休息と観光、三日目に全日観光の日程を希望するはず？である。

台灣国内航空便のオンライン予約は60日前からが一般的だが、3連休以上の予約は航空会社の指定日となる。228記念日をはさむ連休の予約は一律12月28日8時に設定され、当日朝は最初の30分で三連休の初日の午前、最終日の夕方以降の座席は即座に無くなり、当初は初日の夜便、3日目の朝便しかとれなかったが、最終的にはキャンセルが出たようで、往路14時台発、帰路12時台のフライトが確保できた。

宿

金門島は近年観光に力を入れており、買い物客を含め多数の中国人が訪れるため、ビジネスホテルから、古民家を改装した民宿が多く存在している。今回は、台湾の宿泊施設とは風情が異なる民宿への宿泊を決定した。宿の確保は、レース申し込み、航空券確保に比べれば一番容易であった。

3．金門マラソンの概要

種目等の概要：

第9回目となる金門マラソンの種目、参加人数は表1の通りである。費用はフル600元、ハーフ400元と台湾の他のレースと比べると半額ほどでかなり安く感じる。(2015台北マラソンは42K1200元、ハーフ1000元、10K800元）参加者には、ランニングシャツ（福建省に本社を置く協賛企業の「361℃」）のほか、完走者にはバスタオル、2016金門マラソン記念高粱酒500ml（アルコール度数53%）がつき、「費用対効果」は最高レベルかもしれない。さらに、すごいのが、当日早い者勝ち申し込みのファンラン5Kは参加無料、Tシャツと記念品がもらえることになっており、これにも数千人が夜明け前から長蛇の列を作ることになった。

また、金門マラソンは台湾での他のロードレースと同様に賞金レースであり、フルマラソン優勝者には男子20万元、女子10万元、ハーフマラソンも男子25000元、女子15000元（何故男女で賞金金額が異なるのか理解に苦しむ）が支払われ、10位までに賞金が支払われる。また、台湾国内レース最高記録、台湾最高記録者には10万元、大会記録樹立者には1万元（ハーフ5千元）が支払われる。招待選手にはケニアから男女各2名、男子は2時間8分台、女子も26分台の記録を持つ選手がパンフレットには記載してあった。

コース紹介：

金門マラソンのルートは、作者も何度か学術会議で訪れている国立金門大学がスタートとゴールであり、市街地、海、湖、古戦場跡、小麦畑など多彩な風景は変化に富み、飽きのこない島内をほぼ1周廻るコースである。(図1）

図2はコースの標高差を示したものである。金門島で以前の観光経験からは山どころか坂道すら記憶はなかったが、パンフレットによれば、フルマラソンコースでは標高は最高65Mまで上がり、

表1　金門マラソンの種目一覧

	フルマラソン	ハーフマラソン	11.2K	5K
費用	600元	400元	200元	無料
人数	1800	2500	700	数千人
制限時間	7時間	7時間	2時間	―
完走者	1518(1283/235)	2228(1413/815)	514(229/285)	―

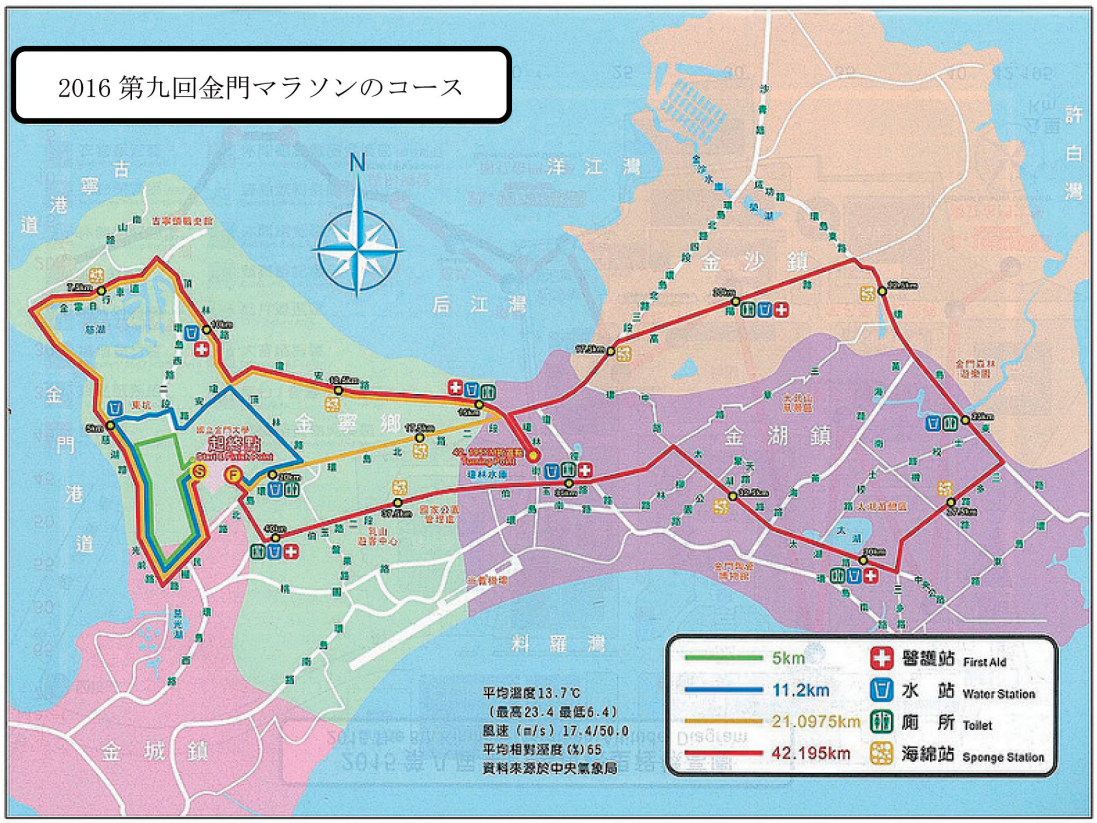

図１　金門マラソンのコース

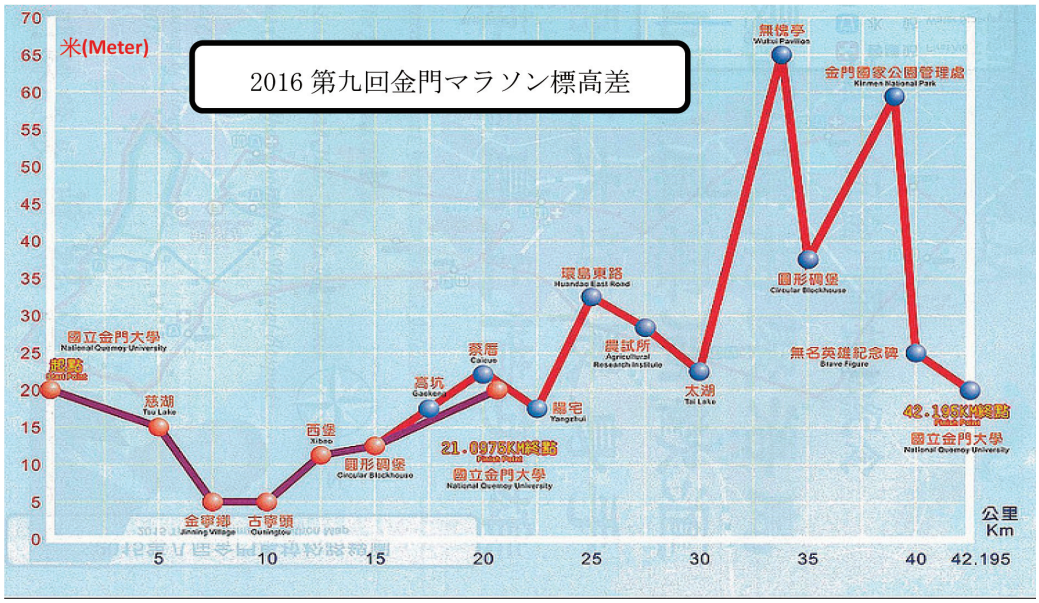

図２　金門マラソンの標高差

それも最大の難所は 30K 以降に控えており、主催者は記録よりも観光を重視したコース設定をしたようである。

私事になるが自己ベスト（3 時間 32 分 42 秒）更新には、終盤の失速を最小限に食い止めるため 35K までは自重し、下りが始まる 38K 以降でラストスパートをするとのイメージでレースに臨むこととなった。具体的には、35K まではキロ 5 分

ペース厳守、最後の３キロで勝負に出れば、目標のサブ3.5（３時間半切り）に届くのではないかという机上の空論を立てた。（勿論、その狙い通りにはいかず、失敗することになるのだが・・・）

４．レース当日の様子

前日

レース前日の２月27日、14時台のフライトで雨の松山空港から金門へは約１時間のフライト、座席は満席。金門は17度の快晴。県営バスを乗り継ぎ夕方には島最西部の金城鎮の民宿へ。この日は明日のレースに備えて近場の海浜公園を散策し、以前連れていかれた牛肉麺（意外な金門の地元美食）屋に行くが、今晩だけでなく、明日昼夜ともに予約で満席と驚くべき状況に遭遇。その後、周囲の落ち着いて座れそうな食堂はいずれも満員状態であり、三連休を過少評価してきたことを後悔する。その日は、場末の食堂で食事難民に陥ることはどうにか回避できたが、レース前に心配のタネが増えてしまった。

夜。古民家を改装した民宿は風情はあるが、冬期の宿泊は要注意であろう。この日の夜は10度以下まで下がりかなり冷え込んだが、室内に暖房設備はついておらず、風を完全に遮断できる窓もないので、かなり寒い。また浴室が部屋の外にあるタイプだったので、特に翌日フルマラソンを控えて体調管理に気を使いたい場合は、暖房が完備されている（はずの）ホテルでの宿泊が望ましいであろう。小生は使い捨てカイロで我慢し22時過ぎには就寝。

レース当日：

４時半起床、あんぱん、おにぎり等の食事を済ませ５時40分に予約済みのタクシーに乗車。小金門島から臨時船で到着したレース参加者のバイク十数台が我々のタクシーを追い越していく。運転手曰く、「普段の小金門から大金門の船の始発は６時半だが、マラソン大会の日だけは５時台に臨時船が出る」とのこと。金門人にとってもやはり、特別なイベントなようである。会場の金門大学には６時前に到着。観光バスで乗り付けてくる大集団も多数、「厦门大学 EMBA」の幟を担いで歩く集団もあり、対岸のアモイや中国大陸からの参加者も多そうである。

荷物預け場所近くで跑友と合流、仮設トイレはさほどの混雑もなく、30分前にはスタート地点への移動を開始するが、現場は日本とは異なりタイム別のブロック分けはおろか、フル、ハーフ、11.2K各組の参加者が同時刻スタートのため混在している状況。さらには、人数的に最も多い５Kのファンラン参加者が大量にスタート地点を

民宿外観

民宿室内

スタート前の様子

占拠しており、「借過、対不起」などと言いながら彼らを押しのけて、前進を続け、どうにか20分前にはスタート地点から100Mほどの好位置？を確保して号砲を待つばかりとなった。

朝6時の時点で10度だった気温は7時の時点で12度に上がり、太陽が出てきたので体感温度はもう少し暖かい。レース終了時の10時台には20度近くまで上がりそうである。

金門県長らの号砲により、スタート。最初の1キロこそ、大学校内を走るためスピードが上がらなかったが、2キロ以降は徐々にペースをつかむ。10キロまでは軽い下りの路を地元小学生による太鼓演奏、穏やかな海岸、小麦畑、静謐とした湖など飽きない景色を満喫するが、意識的に抑え過ぎたため10Kは51分34秒と想定より1分半遅い通過タイムとなった。古戦場の古寧頭を通過した辺りから、キロ5分を切るペースにアップし、「跑友」とはしばし離れ小生が先行する展開。気温はまだ低いが日差しが強くなりはじめ、サングラスが必要となる。21Kは1時間46分丁度で通過、想定から1分遅れの3時間32分台ペース。

古寧頭10K付近

しかし、22キロから25Kまで地図上は標高20M程度の登り坂であったが、意外に体力を消耗してしまう。30Kはまだ2時間31分15秒と予定より1分15秒遅れの許容範囲内であったが、その時点の疲労を考えれば、3時間半切りは諦め、32分台の自己ベスト更新に目標を早くも下方修正せざるを得なくなった。その後、35キロまでの5Kは27分以上を要し、設定タイムよりも3分遅れとなり、この時点で自己記録更新の夢も潰えることになった。35-40Kまでは、従来の想定ではスピードアップ区間であったが、35-38キロまでの登りで足が動かなくなり、37-38キロはキロ6分台にペースダウンし、39キロ以降の下りも足が前に出てこない。急激な失速こそしなかったが、20キロ以降の微妙なアップダウンに疲労がたまり、対応できなかったということなのであろうが、この体験は初めてであった。40K手前で、「これでは3時間40分切りも厳しいか、45分以内で御の字」とさらに予想タイムを下方修正し、半ば心が折れかかったところで、10K以降もキロ5分10秒ペースを守り続けた跑友が追いつき、「最後まで頑張りましょう」と掛け声をかけられ我に返り、並走してもらい、奇跡?とも思えるペースアップをし40キロからの2キロは5分、5分30秒で走りきり、最後は二人で手をつなぎ感動のゴールとなった。友人がいなけば、1－2分は遅れていたはずであり、彼には感謝以外の言葉はない。跑友は難コースにも関わらず、自己ベスト更新となった。

小生の順位は1517人中148位、40代男子480人中54位であった。

GOAL 前の様子

報道によると、男女とも優勝はケニア勢で男子は 11 分台の記録を持つ NORIS KIPKEMBOI BIWOTT が 2 時間 18 分 22 秒で初優勝した。女子は 26 分台の記録を有する EMILY CHEPKEMOI SAMOEI が 2 時間 37 分 11 秒で二度目の優勝を大会記録で飾った。なお、主催者側の記録では、2 時間半を切ったのは男子一人だけであり、2 時間台で走ったランナーも 19 人しかいなかったように、小生が台湾で走ったフルマラソンの中では最もタフなコースに感じた。

5．完走後の雑感

「台湾国内」とはいえ、気候や民情もかなり違う金門は完全にアウエーであり、花蓮や高雄で走るのとは全く違う心構えが必要である。フライト、宿の確保から、現地での交通及び食堂の手配等、海外旅行のようにかなり気を遣った。宿は、観光訪問や夏場であればともかく、台北より気温が低い金門でフルマラソンの前夜に暖房無しの部屋で過ごすのは精神的に苦痛であった。

しかし、これら厳しい環境の中でも金門マラソンは元戦地の雰囲気を色濃く残す独特な雰囲気、素朴で善良な住民、台湾本島とは微妙に異なる風景の中でのレースは格別であり、非常に楽しめたし、走らせてもらったことに感謝の気持ちを抱きたくなる、皆さんにも勧めたいすばらしいレースであった。

GOAL 後に記念タオルを掲げて

GOLA 付近の様子